

議 事 録

会 議 名 第 9 回佐賀県総合教育会議
開催日時 平成 29 年 11 月 20 日（月曜日）11 時～12 時
開催場所 佐賀県庁新館 4 階 プレゼンテーションルーム
出席者 山口知事、白水教育長、浦郷委員、牟田委員、小林委員、音成委員、加藤委員
（知事部局）坂本政策部長、白井文化・スポーツ交流局長
（総合教育会議事務局）今村政策総括監、他
議 題 （ 1 ）スポーツを「する」「観る」「支える」環境づくりのために
（ 2 ） その他

議 事 録

1 開会

（今村政策総括監）

それでは定刻になりましたので、只今から第 9 回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。私は本日進行を務めさせていただきます、政策部の今村と申します。どうぞよろしくお願いたします。本日は、知事、教育長、教育委員の皆様他、執行部から、坂本政策部長と白井文化・スポーツ交流局長が出席をしております。

それでは最初に知事からご挨拶申し上げます。

（山口知事）

どうも皆様お疲れ様です。今ちょうど記者会見があったんですけども、常々、教育長にも申し上げていますので、改めて申し上げることもないのかもしれませんが、できる限り様々な境遇に置かれている子どもの環境、そういったものは、開かれたものにしていただきたいというふうに思っております。どうしても秘匿しなければいけない個人情報というところは踏まえなければいけません。しかし、できる限り誤解を与えるようなことは避けた方がいいと思います。そういったことは教育長は分かっているとは思っていますので、この場で話すのもどうかと思いますけれども、そういったことでこれからも是非よろしくお願申し上げます。

さて、今回スポーツということでありまして、学校関係でいうと、部活と非常に密接に関係するところでもあります。少子化でなかなか部活が確保できないという話と、さはさりながら、社会スポーツといったものも出てきている中で、これは前にも大分議論をさせていただいたことでもありますけれども、佐賀県は 6 年後に国体や全障スポを行う中で、どういうふうにここの接点を作っていくのだろうかということを改めて考えながらやっていきたいと思っております。

もちろん、トップアスリートを育てるといってもそうすけれども、そのトップアスリートの皆様方が、いずれ指導者となって、この佐賀の地に帰ってきて、誰かを教え、そういった人たちが伸びていく。こういう懐の深いというか、単にビシビシ訓練して伸ばしていくということではなく、人生と絡めたような感じで考えています。

トップはトップで、もちろん上の方に行っていっていただきたいですけども、そういうトップアスリートに憧れているみんながいます。ここ2年くらいは佐賀さいこうフェスの時に、ケンブリッジ飛鳥さんなどに来てもらっていて、目の前でドーンと走っている姿を見て、子どもたちが本当に喜んでいました。それを見て、目を輝かして、自分が頑張る、というようなことは素晴らしいなと思います。

そういう裾野を広げて、別にスポーツをしないでも、この前のサガン鳥栖の試合も2万人近く集まって、みんな「がんばるぞ」というのもすごく素晴らしいものがあるし、そういう世界を是非佐賀県からやっていきたいなと思っております。

そういった中で、これからどういうトライができるのかなということを今日は幅広く考える機会にさせていただけると非常に幸いだと思っておりますので、よろしく申し上げます。

2 会議事項

(1) スポーツを「する」「観る」「支える」環境づくりのために

(今村政策総括監)

今、知事からございましたように、本日の議題といたしましては、「スポーツを『する』『観る』『支える』環境づくりのために」ということでご議論いただきたいと思っております。

佐賀県のスポーツをみんなで一緒に盛り上げるためにはどうしたらいいかといった観点から様々なご議論をいただけたらと思っております。最初に知事部局の文化・スポーツ交流局長から現状・取り巻く社会環境などを説明しまして、その後、教育委員会から、部活動の現状とあり方についてご説明をしていただきます。

その上で、どのような形で連携・協力ができるのかというようなことを委員の皆様からご意見いただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

本日1時間の予定といたしておりますので、説明をだいたい5分ずつでお願いしたいと思っております。それではまず、白井局長からご説明いたします。

(白井文化・スポーツ交流局長)

おはようございます。文化・スポーツ交流局長の白井でございます。2023年、これから6年後に国体と全国障害者スポーツ大会が予定されています。この両大会をきっかけに、

スポーツの力で、社会を明るく元気にしていこうという思いで、先ほど、知事がご説明申し上げましたけれども、そういう趣旨で取り組んでいこうと今頑張っております。

その中のレガシーの一つに、誰もがいつでもどこでもスポーツを楽しみ、関わる佐賀になっていきたいということがあります。県民みんながいろんな形で、自分のスタイルに合わせて、スポーツを見たり楽しんだり応援したり、そういう社会を作っていくって、社会全体を活気あるものにしていきたいということです。（資料の）図に描いている三角形は、上に伸びる力というのは、アスリートを生み出していこうと、例えがいいか分かりませんが、ストッキングを締め上げると裾野も広がっていくような、また、逆にいうと、あの日本一高い富士山も、立派な裾野があって初めて高くなれるということで、両方言えるかと思えます。要するにいろんな形でスポーツを支えたり楽しんだり、あるいは頑張ったりということを、この三角形の形で表わしています。

この三角形をどんどん大きくしていこうということで、私たちはこれから、県民・行政としての関わり方、あるいは企業・関係団体等としての関わり方、いろんな関わり方でもって、スポーツをする方、老いも若きもどのような方も含めて、男性も女性も関係なく、障害のある方ない方も関係なく、いろんな方がこういう形で取り組んでいきたいと思って、いろんな施策を考えているところです。

こういったことがなぜ必要かということですが、一つの例として、県内の中学校で頑張っている成績を出した生徒が、けっこう県外へ流出しているという状況がございます。いろいろ伺いますと、県外の強豪校に行きたいとか、あるいはそこにいい先生がいらっしゃるとかそういう様々な理由があって、県外を選ぶ中学生がいるわけです。

しかし中には、例えば、佐賀工業高校の1年生ですけど、柔道をやっている近藤選手は、いろんな誘いもありましたけれども、地元佐賀で頑張りたいということで、現在佐賀に残って、いい成績を出して頑張らせていただいています。あるいは、佐賀北高校の野球部の監督になられた久保監督は、もともと夏の甲子園で優勝した後、大学の進学等で1度は県外へ出られるのですが、やっぱり戻ってきて、母校の監督をしていただいています。地元に戻ってきて還元するということをやっています。

今の中学生にも伝えたいのは、県全体で君たちを応援するよと、そういうところを広く浸透させていかないと、県外に流出という事態にもなるのかなというのもありまして、是非とも先ほどの三角形の形を大きくしていく中で、そういうことを伝えていきたいと思っております。

最後ですが、実際に三角形の中でも、特に学校現場での取組として、まずは、なんといっても指導者をしっかりと育てていく、あるいは確保していくというのが必要であると思っております。また、選手の方も、スポーツになじみのない人に無理にスポーツをなささいというのではなくて、自分の自然な発意の中でスポーツをやりたいと思った時にきちんとやれるような仕組みをこれから作っていかないといけないと思っておりますし、そういう中で頑張りたいという生徒には、その生徒に応じた育成の仕方があるのかなと思っております。

それから、最後に確保と書いていますように、そうやって育てた生徒が県外に簡単に流出しない、しっかりと県に留まってもらって、県で活躍をしてもらうような環境を作っていきたいと思っております。私の説明は以上です。

(今村政策総括監)

ありがとうございました。それでは続きましては学校教育、部活動という観点から現在の状況とあり方についてご説明いただきます。

(白水教育長)

教育長の白水です。よろしくお願いいいたします。

まず、県内公立中学校の部活の現状について説明します。中学校の生徒数が、平成 19 年度と平成 28 年度と比較しますと、3,326 名減ということで、当然、教員数も少なくなっておりまして、部活動の顧問は一人という状況が多くなってきております。そういう中で生徒減に伴いまして、教員数も少ないので、部活の削減ということも各学校で考えておりますが、これまでの伝統があるため、地域からも保護者からも存続の思いが強く、部活動の削減については課題となっている状況でございます。

また、現在、県内の部活動の設置数は 790 部ございまして、318 部が競技経験のない指導者が顧問をしております。割合にしますと約 4 割でございます。A 中学校、B 中学校を例として、生徒数、部活数等挙げておりますが、A 中学校では、特に部活の顧問がいないので、外部指導者を活用するところが増えてきている状況でございます。そして、部員が少ないために、近隣中学校と合同で大会に出場するというのをやっています。B 中学校の方は特に水泳部あたりは社会体育で活動する生徒が多いので廃部をしている、ということ。部員数が少ない合唱部は廃部をして、複数顧問を確保する、という動きをしている学校もございます。

特に新聞報道等でも言われておりますが、教職員多忙化の状況で、部活動が活発になるにつれて、だんだん指導者の多忙化が注目されるようになってきました。平成 28 年度教員勤務実態調査、これは全国調査でございますが、10 年前の平成 18 年度と比較しまして、土日の部活動にかかる時間が 1.04 時間増加している現状が明らかになっております。本県におきましても、教員の時間外勤務の状況が月 80 時間を超える教員数も増えている状況でございます。この時間というのは、すべてが部活動というわけではございませんが、やはり土日の練習時間、大会遠征を含めて、こういうのも一要因となっていると考えられます。このようなことを受けまして、国から休養日を含めた適切な部活動を行うように通知が幾度となく来ておりますが、学校の顧問に代わりまして、部活動の指導や生徒の引率ができる部活動指導員制度が法制化されております。本県におきましても、部活動指導員等については今、検討をしている状況でございます。

これから先の部活動の在り方についてですけれども、特に私たちが考えていますのは、量より質を目指した指導をしていくべきじゃないかと考えております。特にまず、休養日の設

定ですが、11月から第3日曜日を県下一斉休養日と設定しました。実をいうと昨日でございます。後は、選手、指導者の確保・育成ですが、これは特に、運動部活動指導者研修会、または優秀な指導者を確保するために、スポーツ・芸術特別選考やスポーツ分野の実績加点制度を取り入れた教員採用試験を行っております。また、高校入試では、スポーツ推進指定校において、特色選抜B方式を実施しております。平成29年度におきましては、21校41部221名がこのB方式で入試の募集を決めたところでございます。

3つ目ですが、経験の少ない顧問に対してサポートを行う、又は生徒が非常に高いレベルの技術指導を求めている場合がございますので、特に外部指導者やアスレティックトレーナーを派遣する事業も行ってまいります。

資料にはございませんが、支えるスポーツの取組としまして、県高体連では特にスポーツからの社会貢献を奨励しておりまして、優秀な部員で、優秀な学業成績を修め、継続的な社会貢献活動に取り組んでいる個人・団体を表彰する制度を設けて、県高体連独自で、支えるスポーツのところを広げていっております。毎年行われております、さが桜マラソンにおきましても、部活動を中心とした多くの高校生がボランティアとして大会を支えておりまして、県内外のランナーから非常に高い評価を得ている状況であります。

私からは以上です。

(今村政策総括監)

ありがとうございました。

それではここから意見交換に入らせていただきたいと思います。今、社会体育、それから学校教育、部活動という観点からの説明がありました。説明の中で、子どもが楽しく、夢を持ってスポーツに取り組んでいくということについての共通の課題として、やはり指導者の確保というところが一つネックになっていると思われませんが、そういう点について委員さんから何かご意見がありましたらお願いします。

3 意見交換

(山口知事)

4割も競技経験がないというのは、これはスポーツの方、運動部の方ですよね。要はバドミントンをやったことがないけど、バドミントン部の顧問をするということですか。どんな感じなのですか。けっこうきついですよね。

(浦郷委員)

私もスポーツは基本的にやっていないのですが、高校の教員は、誰かがどこの部かに入らないといけないので、ソフトボール部の監督とか、バスケット部の監督とか、そういうことをさせられた、というところちょっと語弊がありますが、自分はしたことがないのに。ソフトボ

ール部であれば自分で小さい頃からやってきたことがあるのでまだいいですが、バスケット部になると。

(山口知事)

バスケットとかは経験がなくて、どうやって指導するのですか。

(浦郷委員)

指導というよりも外部指導者を呼びながらやっています。けれども、監督をしていると、子ども達とか保護者が求めてきます。「教えてよ」と。ところが、教えるだけの技量がない中でやる部活というのは、非常に精神的にも大変な面があります。そういうことが気持ちの面での負担感に繋がっているという現状があります。

そう考えると、4割いるというこの現実を考えた時に、そこをどういうふうにするか。教員の側にとってもそうだし、子ども達の側にとっても非常に重要なことです。

(山口知事)

必ずどれかの部活の顧問をしなければいけないのですか。

(白水教育長)

そうですね。一応どれかに。

(山口知事)

運動部か文化部かの希望はある訳ですね。

(白水教育長)

はい。

(加藤委員)

教員が足りなくて、養護教諭も部活の指導にまわるという中学校もあると聞きます。

(浦郷委員)

事務の先生もいます。

何せ足りないなので、事務でテニスやっているといる方がおられたら、じゃあその人はテニスに、という形になります。

(音成委員)

苦痛ですよ。

(白水教育長)

顧問については、男女それぞれ部活があるところもありますから、その中で先ほど事務の方と言われたように、学校の中でそういう技量がある人を使っています。数字的には4割になっていますけれども。今、保護者さんもそういう面では、昔より熱心な方がいらっしゃいますので、ある程度、土日あたりに来ていただいとかが、今の数字ですと4割ですけど、全然技術指導が行われていないという状況ではないと私は思っています。工夫をしてやっておられていると思います。

(浦郷委員)

私自身も、自分で経験していないバスケットの監督をしていました。それでも、一生懸命勉強します。勉強する中でクリアしていける部分も当然あるので、その中で喜びは喜びとしてあるのはあるんです。しかし、やはり実際自分がそのスポーツをやっていないという思いがあるものですから、授業で自分の国語の授業をするとか、英語の授業をするとかいうようなこととは全然違うプレッシャーがかかります。しかも、部活に要する時間も結構長いですから。そういう両方の面から、魅力、喜びがあるにはあるけれども、やっぱり大変だという思いが現実にあります。

(山口知事)

バスケとかはコーチ次第ですよ。

(音成委員)

それと、保護者が求めすぎる部分があります。先生たちがすごくプレッシャーを掛けられています。

(白井局長)

外部指導員の方にけっこうお世話になっているケースが多いですね。

例えば、引率ができるかできないとか、いろんな縛りがあります。中体連、高体連がしっかり認定した方がちゃんとやってはもらえます。しかし、多分に外部指導者をお願いして、ボランティアみたいな形で来ていただいている方がされているという現実があります。

(浦郷委員)

だから、一様にこうだから大変だというふうに考えすぎてはいけない面は確かにあります。私自身も小城でバスケットをした時に、インターハイに連れて行ったこともあります。その時の監督としての自分の技量はともかくとしながら、やはり、いろんな精神的なサポートもしながら、子ども達とこんなに頑張って全国大会にまで連れて行ったという喜びは現実にあ

りましたけれどもね。自分の教員生活を考えてみても、できなきゃいけないはずのことができてない、という思いがずっとあります。

(山口知事)

よくわからないのが、先生がどの部活の担当になるかというのは、志願表みたいなものでマトリックスにして埋めていく訳ですか。ずっとサッカーで頑張ってきた人達は、第一希望を必ずサッカーにしますよね。ところが重なってしまうので、校長が「ゴメンな」と言って別の部活の顧問をやってもらっているわけですか。

(白水教育長)

そういうところもありますね。別のバレーの顧問をお願いしたり。

(山口知事)

バスケ部の顧問が突然まわって来るのですか。

(浦郷委員)

なんの前触れもなく、突然でしたね。けれど、それを勉強していくのは面白くはありましたがね。でも、その負担たるや、今考えてもやっぱり大きなものでしたよね。

(音成委員)

成績がよくなければ、監督が悪いと保護者から言われます。

(山口知事)

そうかもしれませんね。合唱部とかも、今まであの先生でよかったのにとか、たまらないですね。けど、基本的には解決方法がないですよ。何かありますか。

(今村政策総括監)

外部からそういう専門の人を、というのが単純に考えれば解決につながるのかとは思いますが。

(浦郷委員)

確かに、バスケット部の場合、私もコーチに頼んでいたのですが、その人も仕事していたりします。いつも毎日、毎日来られるわけじゃない。土日の練習試合とか、試合する時に必ずしも来られるとは限らない。だから、いるからいい、というわけでもない。おられると助かります。でも、それ以外の部分は教員の顧問がいろんな処理をしていくことになるので、

その負担が結構大きい。ほんとは自分でその競技をやって、自分の技量も持ちながらやっていければ、もっともっと楽しいだろうな、でもやっぱりきついな、というのが現実です。

(白井局長)

今40種目くらい国体でもありますが、だからと言って学校現場で40種目の部活動があるわけでは決してありません。メインでいうと10種目強くらいです。それ以外は、社会体育の分野でけっこう頑張ってもらっています。ただ、その10数種目でも足りてないという現状があります。

(山口知事)

極論で言うと、社会体育に移行していくと、結構学校の先生たちはゆとりが出て来るとですね。

(白水教育長)

そうですね。ゆとりが出ると思います。だけど、部活動は子ども達が技術的な指導ばかりを求めているわけではないと思います。子どもたちが自主的に、今まで私は顧問の技術指導は、高校の場合なんかあんまりなくても、子どもたちもそういうような指導を上手く、外部の方も入れながら、ほんとに専門の先生がいい部活を作る。技術力だけじゃなくて、やっぱり総合的に子ども達のいろんな自主性なり、責任感なり、人間性なりをしっかりと高めていく。そういうところに子どもたちも魅力を感じてやっています。部活を全部競技力だけのために、社会体育で応援するという事は、今の部活の流れから言えば、技術指導は補完しながらも本来の子どもたちの自主性とか、責任感とか、人間力を高めるとか、そういうところもしっかり重視していかないと、スポーツの考え方、ひいては子どもたちが成長する過程でその辺は、社会体育と学校とを上手くリンクさせることが大事だと思いますけど、本来の部活動の役割をおさえていくのも大事だと思います。

(白井局長)

学習指導要領の中にきちんとそれは位置づけられているわけですね。その中でより高い水準の技能や競技に挑戦しながらも、そのスポーツの楽しさとか喜びとか、人間関係を作っていくというようなことが、たぶん部活動の本旨でありますので、両方指導していくということです。

(浦郷委員)

とはいえ、勝つことを主題に考えていくしかないような環境、状況もあります。そうすると、人間的な部分は、運動をやっていない私たちにでもどれだけでもやれると思うんですけ

どね。それじゃ、子ども達とか保護者は納得しないという現実問題があります。だからその中で、やっぱりある程度のスポーツの指導技術がないとなかなかきついなと思います。

(山口知事)

基本的に保護者の皆さんの想いと生徒の想い、あと、先生の想いというのに不幸なエスカレートやギャップがあったりしてはいけませんよね。ここ難しいですよね。それを上手くバランスを取っていると、きっといい部活なのでしょうけど。どちらかが先に進んでしまうと、そこを微調整して、もっと別のやり方があるのではないかと思います。

(坂本政策部長)

昔と比べて遠征が多くなっているというのが大きいですよね、たぶん。土日とかほとんど遠征ですよね。

(山口知事)

強いところだと、先生含めて保護者の方も、ほとんど土日も含めて夜中もですよ。

(白井局長)

強いところとやるとなると、やっぱり県外に行かないといけませんよね。

(音成委員)

勝つことが目的ですからね。全部そうになっています。

(山口知事)

勝つことの専門集団みたいなところと、そうではないところとか、ある程度整理はついているのですか。うちはこのぐらいね、という感じで。

(白水教育長)

そうです。やっぱり、全部一概ではないので、高校でも指定校がありますので、そういうところで強化しています。

(浦郷委員)

子ども達はなかなかそう納得していないのが現状です。強くなりたいというのが基本ですね。保護者も、せっかく土日練習試合に行っているんだったら強くなって、というふうな思いはあります。それは、監督、コーチ、頑張っ、ということになりますからね。

(白井局長)

けれど、コーチも、ほんとにその子のために良かれと思って一生懸命考えています。トップを目指すんだったら、ちょっとあそこの 校に、ていうことで。だから、そこはすごく悩ましいところですね。

(音成委員)

決して楽しみながらスポーツを、という感じじゃないですよ。

(小林委員)

低年齢化で、小学校の頃から土日遠征っていう社会体育も多いので、中学校に入る以前に、そういう文化が保護者にも、子どもにもできているので、そうやって中学校に入ったら、生ぬるい部活では物足りないの、というのがどうもあるみたいです。

(山口知事)

佐賀県内で中学校時点から地区外に行っている子はけっこう多いのですか。

(白井局長)

中学校というのは、あんまりないかもしれませんが、高校になるとあります。

(小林委員)

近藤選手も武雄だったけど、有田に行ったんですよ。強くなりたいから、先生がいるからと言って。

(山口知事)

私も部活関係で大和の方から成章中学校に来ている人を知っています。けっこうありますよね。

(小林委員)

転居してでも、やっぱり強いところに行きたいから、という保護者さんもいらっしゃる。そういうところはやっぱりトップを目指しているんだろうなって思っているんですけど。

(加藤委員)

佐賀県って人口も少なく、他県に比べたら学校数も少ないっていうのが、反対に考えたら佐賀の強みでもあるのかなと思います。なので、そこは小中高の先生たちがほんとに連携をして、情報もいろんなところで仕入れて、学校教育の中でそれをまとめてやっていくよう

なネットワークづくりっていうことをやった方がいいんじゃないかなと思います。それがやっぱり、小さい県の強みでもあるんじゃないでしょうか。

(今村政策総括監)

学校同士のネットワークですよね。それを社会体育とも連携するようなネットワークもできればと思ったりもしますけど。

(浦郷委員)

社会体育との関係という、どういう関係になるかという、その子どもたちをどこかの大会、全国大会とかに連れて行くときに、統率学校というのがまずあります。そして、派遣をどこがどういうふうにするかということ、学校側が許可しないといけないというような話があって、そういうことでのつながりというのはありますけど。けど、現実的な競技そのものについて、社会体育の方としっかり連携を取れているかという、そうでもないのではないかと思います。

(白水教育長)

三瀬は、剣道を社会体育で、小中高と町全体で人数少ない中でやられています。そこでは剣道か卓球かという感じです。

(山口知事)

でも、さっきの話で、いろんな種目を用意しないといけないのですか。ある程度、メス入れではないが、OBが納得されないですか。

(白水教育長)

少なくしないと、いろんな競技があると競技力もたぶん上がらないと思います。部活の数というのは、減らしていくのが一番の今の課題です。

(山口知事)

佐賀県は、好きな小学校・中学校を選べるのですか。校区外は選べますか。

(白水教育長)

一応、校区内です。

(山口知事)

そういえば、東京は、どこ行ってもよかった。だから、人気のない小学校は少なかった。

(白井局長)

競技によって、例えば陸上競技なんかは、強い子は各地区にパラパラいるわけです。そこは、部活動にはなかなかなりにくくて、そういった子は高校になったら集まってきます。それまでは社会体育の方とか、競技、種目によってこれは色々ありまして、それぞれの競技種目で今おっしゃったような色々な連携の仕方を工夫して作っていくというようなことがあります。

(浦郷委員)

確かに、学校体育で扱う部分と社会体育で扱う部分の振り分けをしないといかんなどいうのはずっとあります。そして、スポーツというと、部活、部活と言いますよね。けれど、そうではなくて、体育の授業あたりを通して、スポーツについてのいろんな知識を身につけていくというのも当然必要です。でも、学校体育の中でもスポーツのことはあんまり話題にならない。スポーツというのは部活みたいになっている。それで本当は部活でやる部分と、スポーツの部分とに分けて、学校教育の体育の授業あたりではどういうふうにするかとか、そういう分け方をしないと実はダメなんじゃないかと思います。

部活に入る者が生徒全員ではない、けっこう割合は多いですけども、そう考えると、さっき裾野の話がありましたけれど、ただ、スポーツをするとか、観るとか、支えるとかいうときに、スポーツをやっている人だけの問題ではないですよ。スポーツそのものへの魅力を持っている人をたくさん作るというのが多分前提にあります。

その時、それを魅力的に思うとすると、それはある程度そのスポーツについての知識がいるんですね。ルールを知らないでサッカー見たってわからない、というのがあります。そういうのをどこでするのか、体育の部分で持つのか、そういう分け方をしないと、今いろんな部分が混乱してしまっているかな、と思います。

(山口知事)

帰宅部もいるでしょうから、部活動に入っている人は、何割くらいいるのですか。

(保健体育課)

90%くらいです。

(山口知事)

90%くらいは、何か部活動に入っているということですか。

(保健体育課)

文化部も含めて90%くらいが部活動に入っています。

(坂本政策部長)

部活動に入らないで、社会体育に入っている人もいますよね。それが10%ですか。

(保健体育課)

そうではありません。本当に純粋に部活動に入っていない生徒というのが大体1割くらいいます。

(坂本政策部長)

部活動に入らないで社会体育には入っている人はどのくらいいるのですか。

(保健体育課)

そこもいますけど、ちょっとその辺の細かいところはわかりません。けれども、社会体育に入りながら、学校の部活動に入っている生徒もいます。両方入っている生徒もおります。

(坂本政策部長)

みんな社会体育に入るといってもいけないのですか。地域にサッカーがあれば、サッカー部は全部思い切って社会体育でとか。

(山口知事)

そこから議論したらけっこう整理がしやすいかもしれませんね。

(坂本政策部長)

そこに社会体育があるならですね。

(浦郷委員)

社会体育がそこまで充実すればいいんでしょうけど、そういうわけにもいきません。

(白井局長)

ヨットだったら唐津とか、ホッケーだったら伊万里とか、地域によって、そうなるかと集まりやすいかもしれませんね。まんべんなく、どこでもホッケーができるかというところでもないですよ。指導者の方も民間の一般の社会人の方になるので。

(浦郷委員)

例えば配布された資料の多種目のスポーツを体験する事業を初めて見たんですけど、こういうのが充実すると、学校体育の部分とこういう社会体育の部分との振り分けがけっこうきちんとできて、指導者の問題なんかも、けっこう無くなってくるのではないかと思います。

(山口知事)

これは佐賀県の特有なところですよ。友達に部活に誘われて、そのまま入って、そのまま抜けられない、とかそういう人がいます。しかし、もっといろんな体験をして、例えばピストルとか、そんなの普通思いつかないですよ。こうやって色々やっていると、マイナー種目でも、「僕はこれだ」みたいなのが出てくるのではないかと。けっこうこの事業、いいですよ。

(白井局長)

チャレンジ・スポーツ教室では、やったことのない子が、800人くらいが集まりました。競技・種目転向型トライアウトは初めてでしたが、第一次でまずこれを聞きに来た子は49名でした。それで、実際にやりたいって言ってきた子が29名来ましたから、5割以上が来ています。ここに来る子は、その競技をやったことがある子なので、本気で来ていますから、即戦力みたいな人もいるらしくて、これは、まだ増えるのではないかと、期待があります。

(山口知事)

一番は、事務局の先生方も同じだと思うのですが、やっぱり補欠だって頑張りたい人はいるんですよ。まったくその通りなのですけど。僕の発想からすると、100人いる部活だったら、何か輝かしてあげたいな、とつい思うようになったんですね。無理して野球部の100番目じゃなくても、輝くところがいっぱいあるからって思っただけではないでしょうか。

(浦郷委員)

そうは思いますけど、子どもはやっぱり、他の競技に転向しないです。よっぽど辞めたい子なんかは別ですが。それを活かしてですね。

(山口知事)

結論的にいうと、もうちょっと辞めやすくしてあげたらいいのかな、と私は思っています。

(小林委員)

やめてもいいし、変わってもいいよという感じですよ。

(山口知事)

ハードルを下げてあげたいですよ。特に1年生の夏頃くらいまでは、もう1回くらいは、「やっぱり」と言ってやめてもいいのではないだろうかと思います。これだけ社会が流動化している時代なのに、ひとつの会社に入ったら一生添い遂げるみたいな発想でやらなくてもいいのではないですか。

(坂本政策部長)

先輩がいるからやめられない、みたいな感じですよ。そういう分岐点、選択制の時期を1年くらい、もう1回みてみていいよ、というのをシステム的に入れると辞めやすいかもしれませんね。

(浦郷委員)

最初は、1学期の時くらいは仮入部みたいな、部活動を見学して、どうするかみたいなことをしています。途中でやっぱり2学期頃くらいでいろいろ考えたい子もいるので、そういうチャンスはあってもいいと思う。

(山口知事)

そこを考えていきましょう。それと、早めに決断迫られますよね。内定じゃないですが。

(小林委員)

うちの息子が、1年で、バレー部に入ったんですよ。やっぱり合わなくて、1年の夏休みくらいしんどかったんですけど、無理やりやったんです。でもやっぱりきつって言ってやめて、ソフトテニス部に入ったんですけど、それで、生き生きして高校まで続けてやっています。その時にやめさせてあげてよかったなって思います。

(山口知事)

その呪縛にはまっている子ども、多いと思います。やっぱり、先輩が怖いと先生に言えないですよ。

(坂本政策部長)

私は、中学校1年の時に入った部活は、1年で辞めました。その時は相当嫌でした。先輩から、「なんで辞めるのか」という感じでした。それから移って、同じようにその後は高校まではちゃんと部活をしましたけれどもね。

(山口知事)

これ、一緒に考えられたらいいですね。たぶん、みんなこれすごく楽になる。頑張る人はもちろん頑張らないといけないと思いますが、そこを上手くして、佐賀モデルを作ればみんな集まって来ますよ。みんな、いいなって、自分に合うスポーツに。

(浦郷委員)

山口知事が前から言われていたことに関係しているんですけど、例えば小学校くらいの時期に、一つのスポーツを特定してやらせ続けるのがいいのかということです。

さっきちょっと小林委員さんからあったように、小学校時代、いろんなことをして、その中から出たり入ったりしてもいいから、選んでいって、中学校くらいになったら、体もできてきているので、その辺に繋げていくような方向みたいなのもあってもいいんじゃないかと思います。小学校なんかでもすごく、社会体育みたいに、それだけやっている子がいますもんね。

(山口知事)

すごいですよね。親御さんの迫力みたいなのが。

(白水教育長)

小学校からやらないと勝てない状況もあります。

(山口知事)

さっきの、いろんな種目をやってみるというのを経験してみたら、いろんな気づきがあります。

(白井局長)

ちなみにこれは今年初めてやったんですけど、いろんな学校現場の方々からのご意見を聞いたりして、小学校の6年生と中学校の3年生はもう部活も終わっていますからいいんですけど、中学校の1年生、2年生は、部活をしている子ではなくて、途中で辞めた子に声をかけに行きました。今年あんまりハレーションを起こさないでくれということで、いきなり引き抜きみたいな、そういう合戦になるのも怖いから。ただ、これはだんだん定着していくようにしていけば、さっきの話のように海外でよく行われているようなトライアウトが実現していくかもしれません。

(牟田委員)

そして、辞めやすいというのも大事だし、前、知事もおっしゃっていましたが、いろんな部活に入っていた方がいいというのはあります。いろんな部活に入りたいんですけど、入れないんですよね。今、中体連も高体連も、自分は野球部とサッカー部と、3つくらい登録して、全部の部活で出るというのはたぶん不可能なんですよ。そういうのは佐賀モデルでうちはしていいっていう制度はありますか。

(山口知事)

剣道部は陸上部では走れないのですか。

(保健体育課)

駅伝だけは違います。

(山口知事)

駅伝だけは違うというのは、どういうことですか。駅伝ができるのであれば、もっと広げればいいのではないだろうか。モデルで、少しずつ広げていけばいいと思います。

(牟田委員)

いっぱい部活動に入って、一方で辞めていいとかやればいいと思います。

(山口知事)

そうだと、先生も楽だと思います。

(白水教育長)

部活の人数が足りないので、陸上部から借りるとかそういうのはあります。

(山口知事)

それができるのだったら、制度的な壁はないはずですよ。

(保健体育課)

その規定があるのは、中体連・高体連の大会だけです。

(牟田委員)

出られないとやっぱり入らないですよ。熱心にできないから。

(山口知事)

中体連・高体連ってというのは全国組織みたいなものですか。

(白水教育長)

そうです。

(山口知事)

それでは、例えばそこは全国に行かなくていいって佐賀は決めてしまえばいいのか、一部を除いて。検討すべき事項がありますね。けどやっぱり何か、糸口があると思います。

(白井局長)

自由にスポーツを選べるっていう雰囲気を作るということですね。

(小林委員)

選択肢があるっていうのがいいですね。

(山口知事)

これがヒットすると、上手く効いて、佐賀モデルができればいいですね。日本中の子どもたちが、みんな思っているから。

(浦郷委員)

それにつけてもやっぱり指導者だなという感じはどこかしますね。かつて、昭和51年、40年前の佐賀国体、あの時からヨット競技だとか、フェンシングだとか、いろんな競技が始まっています。また、今に至っても、佐賀の代表的なスポーツとして活躍しています。ああいうのは、その時指導者を外から呼んでいるケースが多いんですね。指導力のある優秀な人を呼んで、そういう人たちがちゃんと定着して、もう佐賀の人に今なっています。

(山口知事)

定着するのであれば、呼んでもいいとは思いますが。ただ、居てくれないからダメで、ほんとにずっと大事に佐賀を思ってくれる人でしたら、採用してもいいと思う。

(浦郷委員)

けっこう佐賀の人になっている人は多いですよ。やっぱりこういう形で定着していくんだなと思います。人も、スポーツそのものも。だから、今回国体が久しぶりにあるわけですけども、そんな人材確保みたいなのもやっていければいいなと思います。

(今村政策総括監)

人材確保という面では、社会体育との協力みたいなのも進めていくのはどうでしょうか。

(浦郷委員)

それがたぶん、ご存知かとも思うのですけれども、県職とか教員とか、あるいは企業なんかにあって、そんな形が入って来ます。必ずしも社会体育ではなくて、教員であったりした人は、そこで同じようにやっていくんですね。

(山口知事)

OBの方はどうしているのですか。学校の先生がOBして、せっかくバスケットを覚えたのだしたら、そんな人たちを使ったらいいのではないですか。やりたい人はですが。

(浦郷委員)

保健体育課の牛島課長は剣道ですけども、剣道なんか見ていると、やっぱり佐賀で強くなった人たちが帰ってきて、指導者の人口を高めています。

(山口知事)

定年何歳ですか今。5～60歳ですか。

(白水教育長)

60歳です。

(山口知事)

60歳であれば、コーチとしては現役ですよ。後20年くらい教えられますよね。もったいないですね。

(白水教育長)

だから、外部指導者として登録してもらっている人はけっこういます。

(山口知事)

そこを活用して、むしろそういう人たちに部活やらしてもらおうとかはどうでしょうか。そうしたら、やりたくない人は無理しないでもいいのでは。

(白水教育長)

体育の先生がいない時などに教えてもらっています。

(白井局長)

一応、エキスパート枠として予算は確保しています。そういう方がいらっしゃれば。

(牟田委員)

お暇な時に来てくださいますはたぶんボランティアとかでもいいと思うんですけども、定期的に来てくださいますとなるとやはり予算というか、お金の問題が生じてきます。

あと、もう一つ言われているのが、外部の方がボランティアで来たときに、事故が起きた時の責任は誰が取るんだというのでまた話がつぶれてしまいます。

(浦郷委員)

そして、学校体育の中でずっとやっているの、学校の基本的な方針みたいなものを周知してもらっておかないと困る、みたいなものもあります。そういうのを振り分けられたらいいんですけどね。競技についての指導と。その辺が、例えば競技をやっていないような監督さんがついたら、監督さんがなんでもかんでもしないといけないという気持ちでやって、そこに大きな負担を感じるというのもあるんですね。競技力をきちんと見てもらう、というようにセットできると、ずいぶんいいと思いますけど。

(山口知事)

それはきついんですね。剣道の先生はサッカー部とか教えたことはあるのですか。

(保健体育課)

いや、私はありません。わたしはずっと剣道です。

(山口知事)

そういう人もいるのはどうしてですか。優れた指導者として認定されているので、この先生はさすがに剣道部だろうと、校長が決めるのですか。

(白水教育長)

そうですね。だけど、けっこう競技をやっていない人が指導して、たくさん一流に育てている人もいます。昔はやっぱり自分がしていない競技をして、優勝させていらっしゃいます。そういう方がいなくなってきたというのは外からのプレッシャーが強くなってきたというのがあります。

(今村政策総括監)

今いろいろいただいたご意見と、もうひとつ課題があるかなと思っていたのですが、優秀な子どもさん、人材が県外の高校にいかれるケースも結構あります。

佐賀県としては、できれば県内でという気持ちも当然あるわけですけども、そことの関係というのも出てくるんですかね。結局指導者を求めて、県外の環境が整っているところに出て行かれているということですよ。

(山口知事)

鳥栖工業なんかは逆に福岡などから来ていますよね。先生を募って。

(白井局長)

だから、いい指導者やいい環境があれば来るんですよ。

(加藤委員)

高校生のいい人材、すごく活躍した人を県で育成をして、佐賀に残ってもらう形ですよ。 「残ったらこんないいことあるよ」みたいに。

(山口知事)

どんないいこと、ということですね。こんないいことあるよ、をいっぱい作ろうとしているのですが、佐賀に残ろう、とね。しかし、けっこう後になってから言ってくる人がいるんですよ。例えば、他の高校に出てしまったと、でもやっぱり佐賀に帰りたいからなんとかしてくれと言われることがあります。だったら、中におってくれよっていう気持ちになります。

(浦郷委員)

ほんとに、外にいて、佐賀に本当は帰りたいって人がけっこういますよね。でも、受け入れるだけの、というのが逆にこっちの方にないのというようになっています。

(山口知事)

だから、佐賀ですっと活躍する人に多少なにか将来に向かってやるシステムができていればいいですよ。

(浦郷委員)

ちょっとさっきの裾野を広げるという話に関連するかも分かりませんが、確かにスポーツというのはその競技をするわけだから、勝ち負けを競うわけだから、競技力向上というのはとても大切ですよ。

しかし、それと同時に、スポーツの中で精神、心を鍛えるということが学校教育の場面ですごく大切です。そう考えたときに、体を鍛えていく、競技力を向上させるというのと、あと一つ、それを通して精神的なもの、心をどういうふうに豊かに鍛えていくかという、そのところ、その心の部分も人によっては、学校によってはやっていますけど、必ずしも全体がやっているわけではない感じがあります。

例えば、佐賀のスポーツがという時に、競技力を向上させるということと同時にそれを通して精神を鍛える、こんなことができるかはわかりませんが、例えば、小中学校くらいの時に日本古来の武道というようなものを全体にさせながらそこで精神を鍛えていくようなことを片方で持っておく。そういう両用の面を持ちながらいくと、単に勝った、負けただけではないという、スポーツへの魅力の感じ方も出来上がっていくのではないかと思います。なかなか困難な道だという感じもありますけれども、そういう思いがないと、そういうことも出来もしない。裾野の面で言えばですね。

(音成委員)

けど、佐賀の大麻剣道旗というのが、剣道はずっと続いていますよね。

(浦郷委員)

剣道は、私も三養基高校にいたことがありますけれど、三養基高校の剣道部なんかは驚きましたね。何かというと、強い、弱いという話もありますが、とにかくスリッパ一つ見ても、挨拶一つ見ても、やっぱりこりゃ強くなるよね、という感じです。文武、私は文武心と3つ言っていたんですけど、そういうのはとっても大切だなと。強くなる、ならないも実はそこらへんにあるんじゃないかなと。

サッカーの女子の監督さんの本を読んだ時に、やっぱり強い子っていうのはルールみたいなのを教えなくてもちゃんと自分がサッカーをやっているという誇りの中できちっと身につけていくんだ、という話でした。その辺に塵が落ちていたら、そういう子たちは絶対に通り過ぎることはない。人に、目立たないようなことでも、必ずそういうものを拾っていくという、そんな話がありました。そういうふうなことです。体と心と両面が備わらないと結局本当の意味でのアスリートみたいなものを作り上げられはしないような気がします。心の部分もやっぱり、難しいけれども、どうにか「佐賀は」と言わせるくらいのものがほしいなと思います。

(加藤委員)

私は、三瀬中学校が剣道で日本一になった時に、お世話になったんですけど、そこは、地域の力というのがすごく強いなと思ったんですよね。あんな少ない人数ですごいなと思って、色々お話をお聞きしました。やっぱり、指導者の方も素晴らしかったし、子ども達も、地域に支えられて強くなったというのがすごくわかりました。

(今村政策総括監)

あそこは確かに小さい子どもから大人と一緒に全部練習していますよね。みんな練習のレベルは違いますけど。

(加藤委員)

それが素晴らしいなと思ったんですよね。やっぱり、小さいから弱いということじゃないんです。人数が少ないからということではなくて、やっぱり地域を巻き込んでいる。

(山口知事)

剣道とか柔道とかは町の道場に自然と入るのですか。

(白水教育長)

いや、剣道は学校からもあります。

(山口知事)

学校からやるのですか。よく分からないのですが、大和はバドミントンを自然とやっていますし、それこそ、荒踊りやるじゃないですか。その地域は、自然とそうなるのでしょうか。

(白井局長)

兄弟、お兄ちゃんがやっているとかがありますね。

(白水教育長)

例えば町である程度伝統的な競技というのはそういうことが少しありますよね。

(山口知事)

それで、その道に入っていくって感じですか。

(浦郷委員)

佐賀はずいぶん昔、剣道は市内にいくつか、3つか4つくらい道場があって、私の家のすぐ近くなんかにもあったりしました。小さい子が結構行っていました。

(山口知事)

強い学校というのは、だいたい道場から行っているのですか。

(保健体育課)

そうですね。

(山口知事)

なら、だいたいお互いが知り合いということですか。

(保健体育課)

道場が、昔は公民館とかを道場として練習したりしていましたが、今は学校の体育館を使って、道場という形でやっています。

(山口知事)

変わってきたということですね。昔みたいなのではなくて、本当の社会体育でやっているのですね。

(坂本政策部長)

三瀬の剣道は、部活ですか。社会体育ですか。

(白水教育長)

部活と社会体育の両方をしています。

(坂本政策部長)

一緒にしているわけだから、部活と社会体育を一緒にできそうですよね。まさしくそれで一番強くなっているわけです。三瀬の剣道って剣道の先生がいなくても地域にいるわけですよね。なんかできそうな気がしますよね。

(牟田委員)

学校の先生が社会体育の方の指導をしてもいいんですよ。そう思ったらやっぱりできますよね。

(坂本政策部長)

やっているんですよ、すでに。

(山口知事)

先生が社会体育の方の先生やったら、部活は免除みたいにすればいいのではないですか。例えば、部活の顧問じゃない先生はいないのですか。

(白水教育長)

顧問は全部ついています。

(山口知事)

必ずつくわけですね。そこはちょっと検討の余地がありますね。絶対持たないといけないのですか。上手く回していくというか、たまにはですね。

(白水教育長)

部活の数を少なくすれば、2, 3人くらい顧問につかなくていいですけど、やっぱり数が多いから、どうしてもみなさんを顧問につけるとい状況になってしまっている。

(坂本政策部長)

不公平感があるからつけているというのもあるんですよね。顧問につかないでいいっていう話になるからですね。

(牟田委員)

そこでは連携ができてないといえばできていないですね。例えば学校の先生で社会体育の指導をするということがあったら、顧問を免除するというような、そういう約束事があったらいいわけですね。

(坂本政策部長)

不平不満はたまらないですよ。社会体育をしているから。

(山口知事)

そうすると、自分の得意な競技をやれるわけで、自然とこっちも淘汰されて、ある程度じゃあこっちいけばいいね、というように。色々工夫の余地がありますね。やっぱり、不幸なマッチングを無くしたいですよ、いろんな意味で。

(牟田委員)

スポーツをやったことのない先生がやらされているという問題もあるんでしょ。それも多いですね。

(白水教育長)

大野原小・中学校は、あんなに小さくて、体育の先生も少なく、技術力の高い先生たちばかりきているわけでもないのに、小学校と中学校の先生で、協力して、先生たち同士で、卓球とソフトテニスの強い選手も出ています。本当に、それぞれの地域と学校の状況と、これまでいろんな競技をやってきた経緯があります。

いい方法を見つけていくのが大事じゃないかなと思います。

(今村政策総括監)

色々ご意見ありがとうございました。

今、教育長からもありましたけれども、今日の話をつっかきとして引き続き、社会体育と部活との連携みたいな話は今後進めていただければと思います。今回、「スポーツを『する』『観る』『支える』環境づくりのために」というテーマで議論をさせていただきましたけど、また、機会がありましたらよろしくお願いします。本日はこれで終わりとさせていただきます。